



絆～ほんとうに大
切なもの④



<パブー版>

比良岡美紀
(2005, 2007, 2012)

目次

皆様へ	1
(17)	1
(18)	3
(19)	5
(20)	6
(21)	8
奥付	
奥付	12

皆様へ

『絆～ほんとうに大切なもの』パブー版の4回目です。
式典が終わり、パーティーの最中の出来事まで書きました。

ここまでで、以前のウェブ連載とだいぶ変えていますので、この回でも多少変更を加えました。流れを遅くするのがおもな変更ですが（ちょっとタメをつくるような感じです）、もともとのお話にあった個所を復活させたりもしました。以前は字数制限があったため、かなり削らなくてはならなかったのです。

③と④の間があいてしまったので、次はあまり間を置かずに更新したいです……。

どうぞよろしくお願いいたします。

⑤はこちらから

<https://puboo.jp/book/46552>

①はこちらから

<https://puboo.jp/book/43673>

③はこちらから

<https://puboo.jp/book/44553>

(1 7)

「理恵、何だって？」

パーティー会場の受付で、佳恵が久美子に尋ねた。

「依子が遅れるから、しばらく頼むって」

「大丈夫かしら」

「大丈夫よ、私たちで何とかしましょう」

「そうじゃなくて……」

「依子のこと？」

佳恵はうなずいた。

「そうね……」

久美子が思案顔になる。

「大丈夫じゃない？ 理恵が一緒なもの」

「そうね」

佳恵はホッとしたようにうなずいた。

パーティー会場では、俊彦が小西と並んで受付の順番を待っていた。式典が終わる前に出てきたつもりだったが、会場前には長蛇の列ができていた。ふと耳にした会話から、式典には出席せず、パーティーのために出てきた人間も多いと分かった。道理で、と俊彦は思った。式典会場から出てきたにしては、人が多いと思ったのだ。

「川端さんは全然変わっていなかったな」小西が言い、俊彦はうなずいた。

「ああ。まるで俺だけ、年を取ったみたいだった」

依子の姿を思い出す。ついさっき見た依子の後ろ姿に、十五年前の姿が重なった。

依子と理恵がパーティー会場に着いたとき、受付はすでに人でごった返していた。どこからもぐりこめばいいか考えていると、二人を目ざとく見つけた久美子が叫んだ。

「来た来た。こんな時まで遅刻してくるなんて、さすがクイーンだわ」

依子は久美子に向かってちょっと怒った素振りをしたが、俊彦が受付に並んでいるのを

見て、緊張で体がこわばった。そんな様子を察したのか、理恵が後ろから言った。

「久美子の隣に入るわよ」

前を向いたまま軽くうなずくと、依子は人波を縫うように移動して、受付に入った。

俊彦がふと受付に目をやると、ちょうど依子が入っていくのが見えた。その瞬間、心臓が高鳴り、顔がほてるのを感じた。一体どうしたというんだ、俺は――。ほてりを振り払おうとするように、俊彦は左右に勢いよく顔を振った。再び受付に顔を向けると、依子が困った顔をしているのが見えた。どうやら受付でごねている奴がいるらしい。俊彦は不安になったが、隣にいた理恵が助け舟を出したようだ。依子のホッとした顔を見て、俊彦も安堵した。

(1 8)

「ありがとうございます。3000円お預かりします。500円おつりです」

久美子がおつりを渡し、依子は名札を差し出した。この人は当日参加だから、名札にお名前を書いてもらわなくちゃ――。

「すみません、名札をご記入いただけますか？」

名札を見せられた男は、怪訝そうな顔をした。

「なんで名札書かなきゃいけないんだ？」

「え？」

突然投げかけられた質問に、依子は戸惑った。

「すみません、おっしゃっている意味がよく分からないんですが……」

男が口を開こうとしたとき、理恵が助け船を出す。

「当日参加の方は事前申込の方と違って名札のご用意がないんです。十五年ぶりですし、皆さんとお話しになるときにお互いお名前が分かるほうがよろしいんじゃないでしょうか？」

その言葉に納得した男は名札を受け取り、パーティー会場へ入っていった。

「助かったわ、理恵。ありがとう」

理恵は依子に小さくウインクしてみせた。

人の波は絶えることがなく、参加者が次々に訪れる。昨日までは大勢来てくださるかしら、なんて心配していたけど、杞憂に終わってよかったわ。そんなことを考えながら、依子は同期生から会費を受け取っていく。

「次にお並びの方、どうぞ」現れたのは俊彦だった。依子は一瞬凍りついたようになったが、すぐに笑顔を見せた。

「お久しぶり」

俊彦も笑顔で応じる。

「やあ、久しぶり」

そして、先ほどの懸念を口にした。

「さっきは困ってたようだけど、大丈夫？」

「え、ええ。理恵に助けてもらったから」

「そうか。ならよかった」

「心配かけてごめんなさい」

「いや、いいんだよ」

名札に名前を書き込むと、俊彦は依子にマジックを返した。

「それじゃあ」

「ええ」

マジックを受け取る瞬間、手が触れそうになり、依子は息が止まりそうになった。でも俊彦に気づかれないよう、必死で自分を抑えていた。

(1 9)

俊彦は名残り惜しそうに依子の顔を見ていたが、隣で受付を済ませた小西に促され、会場に入っていった。動悸がようやくおさまり、俊彦の後ろ姿を見送る依子だったが、理恵に「次の方お願い」といわれ、受付の仕事に戻る。

「当日参加の方ですね。こちらどうぞ」

俊彦はたった今通り過ぎたばかりの受付を振り返った。依子はすでに受付の顔に戻っている。でもあの笑顔は、俺だけに見せたんだよな――。依子の微笑みを思い出し、満足げにひとりごちた。

「なんだ、お前らもう来てたのか！」

小西の声で向き直ると、懐かしい面々が俊彦を取り囲んでいた。

「おお、久しぶりだなあ！ みんな元気だったか？」

「これより卒業 15 周年記念のパーティーを始めます」

会場内では「乾杯」の声があちこちから聞こえていたが、理恵と依子はまだ受付にいた。人の波が途切れたとき、理恵は依子に尋ねた。

「さっき原田くんと何を話していたの？」

「別に。ただ、さっきは大丈夫だったかって。ほら、理恵が助け舟出してくれた人のこと」
「ああ、あの人ね。それでなんて言ったの？」

「理恵に助けてもらったから大丈夫って言って、心配かけてごめんなさいって」

「そう」

理恵がさらに言葉を続けようとしたとき、受付に人が訪れた。しばらくして理恵がまた口を開いた。

「さっきの話だけど、それで原田くんはなんて言ったの？」

「うーん、いいよ、って言ったかしら。とにかく、マジック渡して、返してもらって……」
俊彦と手が触れそうになり動悸がしたことも思い出したが、それは伏せることにした。

「そのあと、原田くんは……それじゃあって言って、会場に入っていったわ。それがどうかしたの？」

「ううん、なんでもないの。ただ、何を話したのかな、と思って」

「そう」

理恵は自分と俊彦のことを気にしているのだと分かったが、依子にはそれが疎ましかった。私だって分かってるわ、子供じゃないんですもの。

だが依子は分かっていなかった。依子が外出するとき、夫は必ず早く帰宅して依子の帰りを待っていることを。だからこそ理恵が、俊彦とのことを心配しているのだということ。

(2 0)

理恵がそのことを知ったのは、まったくの偶然だった。依子との待ち合わせに遅れそうになり、間違っただけで家にかけてしまったとき、依子の夫が電話に出て理恵は驚いた。帰りが遅くなるから自分のことは心配しなくていい、と夫はいつも言うのだと依子から聞かされていたからだ。

理恵がそのことに触れると、依子から連絡があったときに助けになれるよう、早めに帰宅するようにしていると夫は言った。同時に、依子には言わないでくれとも言った。依子がそれを知ったら子供扱いされているように感じるだろうから、と。たしかに、と理恵は思った。ご主人がいつもそうしていると知ったら、依子は怒ってへそを曲げるに違いない。了解して電話を切り、依子に会ったときも何も言わなかった。

だがそれ以来、理恵は依子が夫の愚痴を言うたび、あなたは分かっていないだけなのよ、と諭すようになった。

依子の隣で、理恵は当時のことを思い出していた。依子は分かっていないのよ、ご主人からどんなに愛されているか。ご主人だけじゃないわ、私も佳恵も久美子も、みんな依子の笑顔を見たい、そう願っているのに――。

俊彦たちは司会者が話している最中も、ずっと話をしていた。

「川端さんが15歳上の旦那と結婚したよりも、俺は松平さんのほうがショックだったな」

旧友の一人が言う。

「なんでだよ？」俊彦はすかさず問いただした。

「だってさ、松平さんの旦那は10歳上だけ。絶対年下と結婚すると思ってたんだ。なんたって後輩の面倒見がよかったしな。それが10歳上と来りゃあ、誰だって驚くだろう」

「いや、俺は驚かなかった」そう言ったのは小西だった。

「俺の叔父夫婦が理恵ちゃんの親代わりでさ。理恵ちゃん、早くに両親をなくして、甘えたい盛りの頃に弟や妹の面倒見てたって、よく聞かされたんだ」

理恵ちゃん、と小西が親しげに呼ぶのを聞き、旧友たちは驚いた様子だった。俊彦も驚いたが、それは理恵が早くに両親をなくしていたことに対してだった。

「だから、甘えられる人を選んだんじゃないかな。まあ本当のところは分からないけど」

「そうだったのか。人間、色々あるもんだな」

理恵の結婚に驚いたと言った同期生は、しみじみと感慨をもらした。

(2 1)

彼女、まったくそんな風には見えなかったな……。久しぶりの同窓会で理恵の知られざる一面を知り、俊彦も感慨にふけていた。小西の叔父夫婦が親代わりだったのだから、東京に出てくる際、近くに知り合いがいるほうがいいからとしか思っていなかった。そんなことがあったなんて……。ずっと前から知っているようでも、何かしら発見があるもんだな。来てよかった――。

ふいに目の端で、誰かが自分のほうに倒れかかってくるのが見えた。「危ない！」叫び声が上がった瞬間、俊彦はその人物を両手で受け止め、抱き起こした。顔を見て、俊彦は動転した。

「川端さん！ 大丈夫？」

「あ、え、ええ、大丈夫。ごめんなさい――」

依子はまた動悸が激しくなっていた。しかも今度は、俊彦の手が肩に触れている。動悸がしているのを、知られてしまったかもしれない。そう思うと居たたまれなくて、思わずうつむいた。

受付から理恵の声が飛ぶ。

「依子！ 急いで！」

「あ、うん！ ごめんなさい、行かなくちゃ。先生が、閉会のあいさつを……」

俊彦はあわてて手を離す。何と言っていいか分からなかった。

「気をつけて」

かろうじてそれだけを言うと、依子の唇に目が行った。真一文字に結ばれた唇が、一瞬、

弧を描いたようになった。

「ありがとう——」

依子は俊彦の顔を正視できなかった。突然のことに動転していた。笑顔はつくったつもりだが、もしかしたら、ひきつっていたかもしれない……。恥ずかしさで体じゅうが熱くなり、受付に戻ってからも顔がほてっていた。

理恵が言う。

「依子、しっかりしてよ。何もないところでつまづかないで」

「ごめんなさい。でも先生のこと、ちゃんと司会の人に知らせてきたわ」

「ご苦労様」

二人は顔を見合わせて、ホッとしたように笑った。

奥付

奥付

絆～ほんとうに大切なもの パプー版④

<https://puboo.jp/book/46547>

著者：miki-hiraoka

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/46547>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46547>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

絆〜ほんとうに大切なもの パプー版④

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
